

今シーズンの最後の 《フィガロの結婚》

真夏日となった6月19日、チューリヒ歌劇場で今シーズン最後の新演出、モーツァルト《フィガロの結婚》が披露された。

ステファノ・モンタナーリの指揮は、リスクをいとわず、息もつかせない。序曲が滑るうが、合唱が合わなかつたが、それよりもエネルギーの放出を止めない。フィルハーモニア・チューリヒも必死でついていく。レチタティーヴォはソロ・チェリストのクラウディウス・ヘルマンも交え、演劇的に効果的だ。ジャン・フライツプ・グロナーの演出は飽きさせないアイデア満載で観客を楽しませた。

歌手陣は歌唱力、演技力とも粒ぞろいを集めていたが、そのなかでも稀有なのがケルビーノ役のレア・デサンドレだ。ここ数年ますます伸びており、今宵も多感な少年を完璧に演じた。スサンナ役のルイス・アルターは冒頭、微妙にテンポに乗れなかったが、最後のアリアは肉感的で完璧。伯爵のダニエル・オクリツチは長身を生かした色男ふりと美声で目立つが、イタリヤ語が不明瞭だった。ほか、バルトロ役のヨルク・フェリックス・シュベール、クルツイオ役のクリストフ・モルターニユを合せて計5人が当歌劇場デビューを成功裏に取めた。フィガロ役のモーガン・ピアーズは声の焦点が常に当たり、聴きやすい。そしてアニータ・ハーティツクの伯爵夫人だが、両アリアでは息が流れず、太い声をなんとか操りながらも辛そうだった。しかしアンサンブルはすべて上手にこなし、伯爵夫人の華もあり、好演したと言える。当歌劇場の専属歌手として長年歌っているマリン・



チューリヒ歌劇場のシーズン最後を飾った《フィガロの結婚》から © Herwig Prammer

遅いテンポ部分ではつまらなく、軽い部分は軽すぎるが、リズムが刻まれると生きてくる。第1場ではエンリーコ役のマツシモ・カヴァレットティと合唱、オーケストラを合わせることも、テンポの変化も先導できず、素人演劇にもへきえきとしたころ、コロナ禍などで延期されていた当歌劇場デビューのリゼット・オロベッサが登場した。ルチアに必要なまろやかな声を高音まで備えており、かわいらしい舞台姿、長い息のコントロールにも長けている。出だしから甘く歌うパンジャマン・ベルネームも加わり、二重唱では満足感を得た。

休憩後、指揮者は数人からブラヴォーを浴びたが、エドガルドとエンリーコの二重唱でも不自然なテンポの移行を見せる。しかしオロベッサの狂乱シーンではすべてを忘れ、拍手が鳴り止まなかった。エドガルドの最後のアリアもベルネームの高い音楽性と声の使いかたの正しさを示し、一流の公演となった。

最後にベツリーニ《海賊》(演奏会形式)についても短く記したい(6月1日所見)。6人の歌手中3人が病欠というアクシデントに見まわれたが、序巻は題名役のハビエル・カマレナに代わったアンドリュウ・オーウエンだ。確信と自信に満ち、この好機を得て伸びていくパワーを感じさせた。イトゥルボ役のトーマス・エーランクに代

《ルチア》再演と《海賊》ほか

興奮を誘った公演としてドニゼッティ《ランメルモールのルチア》再演も挙げたい(5月26日所見)。アンドレア・サンクイネーティの指揮は、緊張感に欠け、とくに

わったルイス・マガリヤネス、シエナ・リヒトミラーの代役、イレネ・フリードリも好演した。そしてヒロイン役のイリーナ・ルンクはロシア人ながらイタリヤ的歌唱教科書のような技術を見せ、ダニエラ・デッシーを思い出させる。指揮のイヴァン・ロベス・レイノソも確実な技術で悪くない。

夏の恒例、歌劇場前広場のパブリック・ビューイングとして、6月10日にはワーグナー「歌劇《さまよえるオランダ人》」11日にはチャイコフスキー「バレエ《眠りの森の美女》」が市民に提供された。

今シーズンの総仕上げとしてネーメ・ヤルヴィ音楽監督がチューリヒ・トーンハレ管弦楽団と披露したのがオルフ《カルミナ・ブラーナ》だ。1日おきに3回公演を組み、最後の25日はオープンエアが予定されていたが、トーンハレ内での公演に変更となった。第2回目の公演日23日はソプラノのアリーナ・ヴンダーリンが病気のため、合唱団チューリヒ・ジングアカデミーからクレッシェンダ・シャープが代役を務めた。堂々とした歌い回しと豊かな声はジングアカデミーのレヴェルを証明する質の高さだが、やはり最高音には無理があり、オルフの求める、輝くような曲想は実現できなかった。カウンターテナーのマックス・エマヌエル・ツェンツチを満喫する好機は訪れなかったが、バリトンのラッセル・ブラウンは彩り豊かな歌唱を聴かせた。ヤルヴィはオーケストラを自在に操り、花火のような輝きを放って終演となった。